シンポジウムⅦ（臨床生理部門）

次世代育成の為の工夫

◎山﨑 功次 1)
社会医療法人 ペガサス 馬場記念病院 1)

【はじめに】

当院は、大阪府の泉北地域に位置し一般病床300床と地域の基幹病院の一つである。検査部門は、検体検査や病理検査、ICTを主業務とする臨床検査科と心電図や超音波検査などの生理機能検査科に分かれている。その内、生理機能検査配属は女性技師：6名、男性技師：６名からなり平均年齢は４２．５歳と比較的中堅からベテランの職員が多い職場である。これまで、新人の教育は行ってきたが一昨年に臨床検査からの移動があったのを契機に、新人教育を見直したのでそれについて紹介させていただく。

【検査室としての人材育成】

当検査室としての人材育成は、検査技術の向上と医療安全に力を入れていることである。まず検査技術の向上については、技術を見せて育てる指導から手順・標準化を明確に示し、基礎を確実に定着させたために目標期間を設け、チェックシートを用いながら短期間で指導している。指導する側も自分が教わってきた同じプロセスで指導するのでは無く、どうすれば早く育つかを考えることができるようになると思われる。また、認定資格の取得という目標を持たせることで本人のモチベーションも上がると思われる。医療安全については、診療科の特性上、車いすや杖歩行などの検査台への介助が必要な患者が比較的多く、移乗時の転倒のリスクを下げる事でトラブル回避が可能で安心して検査を受けてもらえると考える。新人に対し、教育用動画を用いた研修や実技研修を行い検査室全体で安全な医療が提供できるようにしている。

【現状としての効果と期待】

実際には、COVID19感染症の影響で臨床検査へのサポートが増え、思うようには進んでいないのが現実ではあるが、指導する側の意識は確実に変化していると感じている。今後は段階的なステップを踏ませて確実に指導を行っていきたいと思う。そして、患者目線で対応する指導を行うことでバランスの取れた人材育成が可能と考える。

馬場記念病院生理機能検査室　072－265-9194(直)

チーム医療における次世代育成の為の工夫

◎河野 裕樹 1)
市立敦賀病院 1)

医療の分業化促進により、職種毎に専門性をもったスペシャリストがチームを組み治療にあたる「チーム医療」が、様々な分野で力を発揮しており、臨床検査技師もその一端を担っている。チーム医療を遂行するには、全ての職種が同じ目線で意見を出し合うことができる環境と、日常より良質なコミュニケーションをとることが必要不可欠である。チームで活躍できる次世代技師について考えた場合、我々育成する立場の者は、技術と知識の向上はもちろんであるが、忌憚なく意見を述べられる環境づくりや、コミュニケーション能力向上を目的とした取り組みに力を注ぐべきではないだろうか。

当院のチーム医療についての詳細はスライドにて報告する。私自身がこれまで後輩の育成をするにあたり、試行錯誤し苦慮してきたことの一つに、休日夜間における緊急心臓カテーテル検査が挙げられる。これは、限られた人員で患者急変時対応が必要とされる現場であり、時には不測の事態が起きる為、マニュアルどおりの教育では育成が困難である。臨機応変に対応し、各職種と連携する力を身につけることが重要となる。その為には、患者急変の経験を積むことが最も近道と考えるが、タイミングよく遭遇するとは限らない。その為、術中に患者急変が起きた際は、時間を問わず必ず上席技師が立ち会い、その中で心臓マッサージや物品の引渡し、記録などの職種横断的に対応する業務を後輩と共に行い育成を図っている。また、入職から早い段階で院内委員会活動に積極的に参加させることで、情報交換やコミュニケーション能力の開発にも取り組んでいる。

私自身、これまで院内外問わず、たくさんの方々から叱咤激励を頂きここまでやってこれた。次世代技師にも、様々なチーム医療の中でいくつも失敗をしながら進んで欲しい。致命的なミスにならないように見守り、活動しやすい環境をつくることが先輩技師の務めであると考える。

連絡先：℡0770-22-3611（内線 7167）

次世代育成の為の工夫

外部活動（院外教育）の役目と今後の課題

◎今川 昇 [1)]
一般財団法人 京都工場保健会 [1)]

次世代育成の一つに外部活動（技師会や研究会）の参画も重要な課題を思われる。施設外の技師や他職種と関わりを持つことは、今後の技師人生をより充実させる一つではないかと考えている。2020 年 3 月新型コロナウイルス感染の世界的パンデミックにより、各業界で様々な社会的制限が発生し、我々医療業界においても外部活動を制限せざる得ない状況となりました。現在は、コロナ過によりオンライン研修会（ハイブリッド型やリアルタイム型）が広く浸透しました。私の所属している研究会や京都府臨床検査技師会においても 2020 年からオンライン研修会となり、一部の研修会は少人数の対面を交えた形で研修会を展開してきました。開始当初は、新しい情報発信の為、オンライン研修に参加する会員のためのマニュアルや開催側のツールなど、初めてでも参加できる環境支援を行ってきました。
特に主催側の支援を担うために、ウエブサイトの開催ガイドやオンライン研修を実践する上でのポイントを整理して、ノウハウを提供しました。さらに参加者を対象としたアンケートを実施し、内容の理解度や配信方式など、研修会に関する要望を整理し、より参加しやすい環境を準備することに努めました。
配信方式については、参加者にとって、オンデマンド型だといつでも受講できる為、メリットを感じた結果であった（リアルタイム型は意外に人気がない結果でした）。コロナ過によって、全国の技師会や研究会がオンライン教育を経験することになった。
今後コロナ過に限らず、様々な事情で参加できない方を想定することも必要であり、学ぶ機会の自由度の高い教育方法として、オンライン活動の浸透を求める声は高まっていくと考えています。
本シンポジウムでは、人材育成・教育方法での院外教育の役割や次世代の外部活動参画、今後の Web 活用における人材育成への期待を述べたい。
連絡先ー 075-823-0524（検査課直通）

臨床検査技師に地方病院の一医師が期待すること

◎三田村 康仁 [1)]
市立敦賀病院 診療部 循環器内科 [1)]

皆さんの職場の雰囲気は、どのような感じでしょうか？参加した誰もが、自分の意見を言える雰囲気でしょうか？新しい医療機器・システムのへの対応・作成には、部署内、多職種間、いろんなグループでのコミュニケーションが必須です。
エピソード①：新しい心エコーの指標である GLS に関する、当院での始まりのエピソード。
エピソード②：専門外の疾患を見た際に、検査技師からの指摘に、助けられたエピソード。
いずれも、コミュニケーションが、適切になされたことで、医師にも、患者にも還元される取り組みとなりえたと考えられました。
技師の取り組みは、直接的な医療の範疇にはとどまらないと考えています。
病院には、いくつもの委員会がありますが、医学に直接かかわる分野の委員会は、医師がリーダーとなったり、イニシアティブをとることも多いし求められることも現実には多いと思われます。しかし、委員会の中には、直接的に、医療にかかわらない観点で活動できる分野もあります。そのような分野では、長期に関われる状況にある検査技師が、リーダーとなったり、イニシアティブをとっても良いかと考えております。しかし、上で述べたようなエピソードのような、医学的に医師もしくは他の医療職に医学的知識・検査結果などを報告することも、院内の委員会活動での積極的なリーダーシップを発揮することも、検査技師に安全に意見を発することが許される土壌がなければ、成立しえないと思われます。
病院に検査技師に期待されている行動や発言は、心理学でいうと、マズローの欲求の５段階においては、初期段階ではなく、より高度の欲求に当たると考えます。より高度の欲求を、検査技師に呼び起こし、より病院に貢献できる活躍する土壌として、まず初期段階の欲求である安全な場の形成が必須であると考えます。
次世代育成の方向性として、また、病院全体のより良い変化を起こす土壌として、コミュニケーションの方法に目を向けるのも、方策の一つと考えます。